

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金

企画研究プロジェクトⅡ（教員・学生参加型）2022年度研究成果報告書

プロジェクト 学生代表者	学科・学年	氏名
	コミュニティ政策学科・3年	川嶋みづか
指導教員	所属・職名	氏名
	コミュニティ政策学科・教授	原田晃樹
研究課題	温泉地の地域活性化を視察し、持続可能なまちづくりを知る	
研究年度	2022年度	
プロジェクト 分担者	岩間幸枝・柏崎陽太・高野光平・本間早瑛	

プロジェクトの内容及び成果の概要

昨年8月にゼミ活動の一環として登別温泉（北海道登別市）を視察し、持続可能な温泉街をテーマに登別温泉の現状・課題を考察し、類似する温泉観光地についての文献調査を行った。その成果については、10月30日に開催された「全国政策フォーラム in 登別」において政策提言という形でとりまとめ、発表した。私たちは、以上の成果を踏まえ、地域の主体的な取組によって地域活性化に結びついた温泉観光地をピックアップし、文献調査によってその展開過程を調べてみた。その中で、①交通の便が悪い（高速のインターや鉄道駅から遠い）地に立地している、②特定の人・事業所だけではなく地域のさまざまな関係者の参画によって地域づくりに取り組んでいる、③大手資本の力を借りることなく地域が主体となって取り組んでいるという条件に照らして事例を考察してみた。その結果、特に黒川温泉郷が条件に当てはまった。そこで、私たちは黒川温泉郷がこれまでどのような地域づくりを行ってきたかを調べた上で、実際に温泉郷を視察させていただくことにした。

黒川温泉郷は、「入湯手形」（好みの旅館の露天風呂を入浴して回れるもの）の発祥の地で、30軒の宿と里の風景を含めた黒川温泉郷を一つの旅館に見立てて、一つ一つの旅館を「隠れ部屋」、旅館をつなぐ小径を「渡り廊下」というコンセプトを打ち出している。つまり、地域全体で温泉郷の魅力を高める取組を行ってきたのである。この取組が実を結ぶまでにはさまざまな紆余曲折があり、熊本地震の影響で一時期大きな打撃も受けたものの、近年では回復基調にあり、宿泊者だけでなく日帰り入浴を目的とした観光客を呼び込むことに成功している。

私たちは実際に旅館に宿泊し、黒川温泉旅館組合関係者にインタビューを実施した。その中で特に印象的だったことは次の2点である。ひとつは、「入湯手形」についてである。多くの温泉街で「入湯手形」に類似する仕組みは模倣されたが、ほとんど普及していない。その理由は、これが普及すると宿泊客数が減少してしまう可能性があるからである。「入湯手形」は、地域全体で温泉郷を支えるという黒川温泉の姿勢を表したものともいえる。もう一つは、地域資源循環の徹底である。一般に温泉街はフードロスが多くなる傾向がある。黒川温泉郷では、空き施設に廃棄する食品を集め、温泉熱と蒸気で微生物を培養して有機肥料をつくり、それをういて実際に有機トマトを栽培し、加工品としてトマトジュースの販売も行っている。フードロス問題を逆手にとり、温泉郷のブランド化に結びつけようとしているのである。

私たちは、以上のように、文献調査に加え、現場を訪問することを通じて、単なる温泉観光地の活性化にとどまらず、持続可能な地域づくりの実践をうかがい知ることができた。以上の知見を活かし「まなびあい」の発表準備を行いたい。